

台湾茶の歴史を訪ねる 第四回

(4) 東南アジアから旧満州まで 輸出された包種茶の歴史



須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

もう15年以上も前になるが、香港に住んでいる時、思い立って台北へ行き、台北郊外の茶畑を訪ねようと思った。知り合いの台湾人に尋ねると『取り敢えず動物園まで行って、そこからタクシーに乗れば行けるよ』と言われたのでその通りにした。目的地は猫空という面白い名前だったが、タクシーの運転手と話していると『猫空は観光茶園のある場所で貴方の行くところではない。坪林へ行くべきだ』と言い出し、そのまま車を反転させて坪林へ向かった。

それが包種茶との出会いだった。連れていかれた茶農家で飲んだそのお茶は、かなり発酵度が低く、緑茶かとも思い、またジャスミン茶の変形かとも感じた。それ以来、何度もその茶農を訪ね、農家料理を堪能しながら、その不思議なお茶を味わっていった。ただ包種茶と烏龍茶、いずれも半発酵茶であるのだが、その違いは単純に発酵度の違いだけだと思っていた。そしてその歴史に関心を持つことは全くなかった。



12年前の坪林の茶農家で

福建の包種花茶から台湾の包種茶へ

包種茶とは一体どんなお茶なのだろうか。その製法に関しては烏龍茶と同じ半発酵茶であり、発酵度が低いというのが一般的な違いと解釈されている。作り手に聞くと『現代の製法では烏龍茶が釜炒りを2回、包種茶は1回』という違いだったとも説明もされたが、これは場合によるらしい。基本的な製造工程は同じだが、その細部の作業内容の違いにより、花香が醸し出るのが包種茶の特徴だというのが分かりやすいかもしれない。

元々包種茶は種茶と呼ばれ、それを紙などで方形に包んだことがその名の由来と言われている。現在包種茶は中国大陸にはなく、台湾独自の茶と言われているが、やはりその起源は中国福建にあるようだ。1796年、王義程という人が安溪で開発したと言われているが、その茶は武夷岩茶の製法で作られたとも言われている。武夷茶の製法は釜入りが2回、それを1回にした安溪流の製法をベースに花を付けたのだろうかとも想像してしまうがどうだろうか。いずれにしてもその製法についての資料は現時点ではないという。

1860年代になると清とイギリスによるアヘン戦争の結果、台湾でも淡水が開港され、洋行(外国商人)が茶を求めてやってくるようになった。初めに輸出されたのはいわゆる烏龍茶だったが、1873年、その烏龍茶が乱造で売れ残り、困った商人がこの在庫を福州にもっていき、花香を交ぜたのが包種茶の始まりだと書かれている本もある。ただこれらの茶は包種花茶と言った方がよいかと思う。因みに福州は当時、中国で唯一ジャスミン茶を製造している場所であったことも大いに関係していると考えられる。

この包種花茶が意外や人気となり、1881年には福建同安出身の呉福源（呉福老ともいわれる）が台北でこの茶の製造・販売を始めるために源隆号という店を立ち上げた。また王安定、張古魁も建成号を興して、台湾での製造が始まった。この頃は中低級の烏龍茶と花を交ぜて包種花茶と呼んでいたともいうが、烏龍茶で花の香りがすれば包種茶と言っていたのかもしれない。

そして1885年頃、福建の安溪（鉄観音茶の産地）から王水錦と魏静時の2人が相次いで台湾にやって来た。彼らは台北郊外の南港大坑で、我々が現在包種茶と呼ぶ、花をつけるのではなく、花の香りが自然に醸し出される茶の開発に成功した。それにより、包種茶は台湾茶として世に出て行くことになる。ただそれは既に日本統治時代に入った1910年代の出来事だったと一般的には言われている。

因みに中国大陸、特に福建から台湾に渡って来た人々は、まずは平地に居を構え、農業に従事した。淡水に上陸した人々は現在の汐止、南港に定住した。中には安溪あたりから茶作りの経験のある者も来ていたらしい。現在包種茶の産地として有名なのは坪林だが、その発祥地は南港・汐止、その次が石碇である、というのがほぼ統一された見解である。

包種茶の発展と郭春秧

1895年に日本統治が始まり、中国大陸との交流が制限され、それまで厦門などを經由して輸出されていた台湾茶は、台北の大稻埕に居を構えた茶商たちによって輸出されるようになる。烏龍茶はアメリカ市場が中心だったが、包種茶の輸出先は東南アジアが中心だ。その輸出には華僑が大きく関わっている。

特にオランダ領インドネシア（蘭印）への輸出が多かった初期、その輸出ビジネスに大きく関わった男がいた。郭春秧、彼は福建同安の貧しい



茶葉が輸出された大稻埕

出身だったが、10代で叔父を頼って蘭印へ渡り、その後砂糖ビジネスで大成功を収め、南洋4大砂糖王の一人とも呼ばれた。そして1887年にはすでに包種茶に商機を見出し、大稻埕へ進出、錦祥茶行を開業した。2017年4月号の中で既に紹介した東邦紅茶の創業者、郭少三の父、郭邦彦はこの錦祥茶行で支配人を務めている。



インドネシアに輸出されていた頃の包装

※2017年4月号P15の文中に『郭家は少三の祖父、郭春秧が・・・』と記述したが、その後ご遺族より『郭春秧と少三は同じ郭姓ではあるが、その姻戚関係はなく、最も信頼できる雇用主と支配人の関係にあったと認識している。但し何の関係もない者をなぜ錦祥茶行の支配人に取り立てたのかという疑問は今も解決していない』との説明を受けたので、ここにお詫びの上、訂正する。

何故初期の包種茶輸出が蘭印中心であったのか、それはこの郭春秧などのインドネシア華僑が有力なルートを持っていたからだろうと推察され

る。また台湾における茶業者の集まりでも、早々に会長を務めていることから、その資力、影響力は十分に発揮されたものと思われる。明治34年(1901年)に包種茶の商標登録を同業15社の代表として農商務省に申請するため出頭したという記録も残っている。但し日本統治が始まると、外国商人と華僑は排除の対象になっており、郭が茶業公会の会長になることはなかった。

ところで香港の北角には郭春秧の名前を取った春秧街という道がある。香港における郭の足跡、功績、そして茶の関りを調べに行ってみたが、何と資料は殆どなかった。香港人は春秧街という名は路面電車(トラム)の終点の地として誰でも知っているが、郭春秧という名を知る者は殆どいない。彼は発電所を作るためにここを開発したが、その後住宅建設に転用したという。その後この地は一時福建系移民が多く、小福建とも呼ばれたが、今は何とインドネシアからの出稼ぎ者が多く住む街になっている。これは蘭印の砂糖王、郭と何か関係があるのだろうか。



香港北角 春秧街

因みに香港には老舗茶莊はいくつもあるが、そこで包種茶というお茶を売っているのを見たことは殆どない。台湾から香港経由で輸出された包種茶もあったはずだが、なぜ香港にはないのだろうか。ある茶商は『香港では包種茶も烏龍茶として売られていた』という。このあたりはどのような

区別がなされたのか、知りたいところだが現時点では不明である。

烏龍茶を上回る包種茶輸出

当初は烏龍茶の陰に隠れていた包種茶だが、1910年代、ちょうど台湾包種茶が開発された頃から、輸出環境が整ってきている。当時茶業金融は厦門などが握っていたが、それが台北に移ってきたこと、また東南アジア向けの直接航路も開通して、輸送が一気に簡単になったことなどが挙げられる。1915年には茶商公会が設立されたが、その会員名簿を見ると包種茶を商うものが多かったことが分かる。1919年には東南アジアで金融を供給するための華南銀行も設立されているが、大株主には当時の台湾一の富豪、板橋の林家など茶業関係者もあり、茶の輸出と銀行設立の関係も何となく窺われる。

そして1920年代、総督府の肝いりで文山地区において春と秋の年2回、高齢の王水錦と魏静時の技術を継承するため、包種茶製造講習会が開かれており、多くの茶農がここで学び、包種茶の生産量を伸ばしていった。売れるようになれば品質も向上していく。これらにより、20年代には包種茶の輸出量は烏龍茶を上回るようになる。尚王水錦は高齢で目も悪く、1924年に亡くなっており、魏氏が得意とした(開発したか)清香式が一般化し、今の包種茶に至るとの説があるのは、これには異論もある。



文山に残る茶業指導所

その後包種茶のニーズが増え、製法が普及していくと、台北付近のみならず、桃園、新竹、苗栗などでも包種茶生産が盛んになったようだ。先日新竹の横山郷に行ったが、1930年代に『横山包種茶』と書かれたポスターが残されているのを発見して、驚いた。実はこの付近で作られた包種茶の品質は当時新竹周辺で一番良かったとの話もあり、今では思いもつかないが、相当の生産量があったと考えられる。



横山包種茶のポスター

ただ『当時新竹では関西紅茶が名を成していたので、対抗上横山包種茶を宣伝したのかもしれない。何故ならこの地で作られた包種茶は苦勞して大稲埕まで運ばれたが、その多くは原料茶であり、ブランド化されるものではなかったはず』との意見も聞いた。確かに現在の坪林を見ても、北部だけでは大量輸出するほどの茶葉は産出されないように思われ、大稲埕の茶商により文山と新竹の茶などがブレンドされて輸出されたのだろう。あのポスターは各地域の役所の対抗意識からできたものかもしれない。

ただ1929年に始まった世界恐慌は蘭印の経済も揺るがしていき、茶の輸入課税が強まるなど、輸出が激減してしまう。またその頃には包種茶輸出をけん引してきた人々の世代交代が進み、これまでの蘭印から日本の管轄下に入った満州への輸

出が伸びていく。これは中国から満州が切り離され、日本統治下の台湾の輸出に優位性が出た結果でもある。当時大連などには台湾の茶業者の支店が開かれ、茶の売り込みが活発だった。1937年の盧溝橋事件以降は、満州への中国茶輸入は全面禁止となり、更に包種茶需要が高まった。そして1941年以降の台湾茶は輸出先が無くなった紅茶ではなく、満州向け包種茶輸出に収斂されていく。

一方東南アジアでは1935年頃にタイとベトナムへの輸出が増えている。総督府は茶の輸出を奨励し、輸出補償法を制定する。これは茶葉輸出で損失が発生した場合、その60-70%を総督府が補てんするという貿易保険のようなものだろうか。このような政策もあり、茶の輸出量は積極的に手掛ける茶商が増えた。

尚今回の調査の中で、1920年以降、台湾茶商で沖縄に支店を出していたところがあることが分かった。元々沖縄ではさんぴん茶と呼ばれるお茶が一般的に飲まれているが、これはいわゆるジャスミン茶、それも低級な香片茶の発音が訛ったものと思われる。ジャスミン茶はそもそも福建の福州で作られていたもので、琉球の朝貢の窓口であったこともあり、この茶が伝わったと考えられる。

戦時体制下に入ってくると、中国大陸からの茶葉の輸入が難しくなり、代わりに台湾の包種茶が沖縄に輸入されていたのではないかと推測される。ただこの茶が低級茶の花をつけたものなのか、自然の香りのものであったのかはよくわからない。これは満州へ運ばれたものについても同様の疑問が残っている。

タイと包種茶の繋がり

坪林で1921年に創業された老舗の祥泰茶荘の第3代、馮明中氏は『昔はタイへの輸出が多かった』と話す。『タイは特に潮州系と客家系の華僑が多く、包種茶は好まれた』ともいう。また『タ

イは僧侶が多いが彼らも包種茶が好きだった』と話す関係者もいたが、現在のタイ僧侶事情に詳しい知人によれば『少なくとも包種茶という名前は聞いたこともないし、そもそも寺で茶が飲まれることはあまりない』と説明された。



祥泰茶荘の馮明中氏

バンコックのチャイナタウン、ヤワラーを歩いていると、茶荘に南港茶と漢字が書かれているのが、目を惹き、思わず中に入って、このお茶を買った。だが店番のおばさんは『これは台湾の茶ではないよ』と素っ気ない。恐らくは昔は台湾から輸入していたが、今ではタイ国内で生産しているのではないかと推測する。微かにブランドだけがタイと包種茶の繋がりを示している。

そういえば、やはりヤワラーにある三馬牌はタイではどこでも売っている有名な茶だが、台湾では宝記と呼ばれ、かなり深い繋がりがあるようだ。台湾のある茶商は『今年から宝記への輸出を再開したよ』と言っており、その昔はかなりの輸出量があったことを窺わせ、その歴史は日本の敗戦後も続いていくことになる。



バンコックで今も営業する三馬茶



バンコックのチャイナタウンで売られていた南港茶

包種茶は烏龍茶と同じとこれまで考えてしまっていたが、今回の調査で少なくとも台湾では完全に独立したカテゴリーであることがはっきりし、またその輸出量も台湾茶業をけん引するまでになっていたのは、驚きだった。次回は光復後の包種茶について、触れてみたい。



73年前に作られた包種茶